

# Desert Wind (No. 6)

Las Vegas Japanese Community Church

MAY 2007

『わたしは荒野に道を設け、さばくに川を流れさせる』(イザヤ 43:19)

編集：平山末樹

## 『キリストの寛容』

(LVJCC 牧師：鶴田健次)

結婚式で読まれるコリント前書の『愛の賛歌』の中に「愛は寛容である」という言葉があります。つまり、愛の特徴の一つは「寛容」であるということです。ここで言われている愛は、すぐに変わり易い感情的な愛ではなく意思的な愛です。ですから、「寛容」ということも意思的なものです。まさにイエス様がそのような寛容の持ち主でした。イエス様のもとにはあらゆる種類の人々がやって来ましたが、イエス様はそのすべての人々を受け入れなさいました。罪深い生活をしてきたサマリヤの女も、また嫌われ者の収税人ザアカイも、イエス様に受け入れられ、イエス様の寛容に触れて、その生涯が変えられた人々です。そして、あのパウロもイエス様の寛容に触れ、180度の人生転換を経験しました。

パウロは、弟子のテモテに宛てた手紙の中で、「主はわたしを忠実な者と見て、この務めに任じて下さったのである」と書いています。もともとパウロは決して忠実な者などではなく、クリスチャン迫害の先頭に立っていた人でした。当時のクリスチャンの誰もが彼を恐れていました。そんな彼が、外国に逃げに行ったク

リスチャン達を捕らえるために、ダマスコという所に出かけて行く途中、復活のイエス様に会ったのです。

そこで、「サウロ、サウロ、なぜわたしを迫害するのか。とげのあるむちを蹴れば、傷を負うだけである」と言って近づいて下さったイエス様の寛容な人格に触れ、パウロは生まれ変わって、キリスト教の迫害者から伝道者に変えられていきます。その経験をもとに、彼は、「私は決して忠実な者などではなかった。いやむしろ私は、神をそしり、キリストを迫害する不遜な者であった。しかし主は、私の人生の汚点をことごとく十字架の血潮で洗い清めて下さり、あえてこの私を忠実な者とみなし、キリストの福音の使者という尊い務めに任じて下さったのだ」と告白しているのです。

私も、かつては神をそしる者、またイエス・キリストに対して不遜な者でした。ごう慢で、自己中心で、自分の事しか考えない、神も仏もそんなものは一切受け付けないという人間でした。そんな私のために、一年間も、誠心誠意、熱心に伝道をしてくれた友人に対し、どこまでも理屈をこね回して抵抗し、あげくの果ては、たとえ世界中の人がキリストを信じて、絶対にキリストなんか信じるものと悪たれ口を叩いた者です。たとえ無知からとは言え、よくもこんな神を冒瀆する言葉を口にしたものだと思います。

またクリスチャンになってからも大きな罪を犯した者です。しかし主は、こんな不遜な者を、寛容の限りを尽くして愛し、救いに導いて下さいました。そればかりか、この私を忠実な者と見なし、福音の使者という光栄な働きのために召し出して下さったのです。このように、本当はそうでない者をそのように「見なす」ということは、余程の寛容がなければできないことです。人の能力を能力どおりに評価することは誰にでも出来ますが、能力以上に評価することは、その人に対する信頼と期待がなければできないことです。そして、「イエス様がこの私に大きな信頼と期待を寄せて下さる」ということが分かると、私たちの内に、何としてもその信頼と期待に応えていこうという応答が生まれてきます。パウロは、このイエス様の信頼と期待を理解できたからこそ、「福音を宣べ伝えなければならぬ、わたしはわざわいである」と言ったのだと思います。

あなたは如何ですか。イエス様があなたを信頼し、また期待し、あなたの人生に素晴らしい計画を持っておられることをご存知ですか。ぜひイエス様の信頼と期待に応えようではありませんか。

## 証

### 『神様のわざ・不思議な洗礼』

松岡みどり

20年前、幽体離脱というものを体験しました。それは長い間友人から勧められていた教会に行ったときのことで

それまでの私は、クリスチャンという人種は好きではなかったので、自分が教会に行くなんて考えられないことでした。しかし、長い間辛抱強く教会に行くことを勧められていると、気分のいい日に『一回くらい行ってみたいかな』という気になるもので、思い立ったその日に行ってみることにしました。

教会の扉にカギがかかっていたので恐る恐る中に入り静まりかえった会堂内を眺めていると、一人のやさしそうな牧師さんが来られ、『良くおいで下さいました、お時間があつたらお話できますか?』と丁寧に聞いて下さいました。

私と牧師さんは長椅子に座り、どちらから来られたのかとか、どこでお知りになりましたかとか、キリスト教に興味がありますか、などと質問をしてこられました。私は今思えば顔から火が出そうほど高慢で、無礼なことを生意気な態度で話したと思います。しかし牧師さんは終始にこやかなお顔で聞いてくださっていましたので、そのうち私は調子にのって、聞かれてもいないこと『何で私がキリスト教を嫌いか』という理由を偉そうにしゃべりまくりました。すると牧師さんは、『そうですね、私もそう思います』と仰いました。耳を疑いました。私は、『でも聖書では…』という言葉が返ってくると思っていたら、この牧師さんは『私もそう思います』と仰ったのです。

実は、その言葉が引き金となり、牧師さんの話を聞きたくてたまらなくなったのです。私の心は一瞬で方向転換をしました。

私は牧師さんにとくさんのことを聞きました。牧師さんはひとつひとつ解りやすく時間をかけて説明して下さい、その話と話し方が、まるで魔法のように気持ちよく感じられたのです。この満ち足りた気持がいつまでも続いたら何と幸せだろう、と思ってしまううちにふと気づくと、私は高い天井近くにおいて牧師さんと長椅子に座って話をしている自分が見えました。『おやっ!』という感じはありましたが、

そんなことも気にならないくらい幸せな気持ちでした。天井にいる私は洗礼について知りたいと思い、肉体の私が質問しました。この教会の洗礼は全身水の中に入るとの説明を受けると、肉体の私は幼い頃の溺れかけた記憶がよみがえって尻込みし始めました。しかし天井にいる私は、洗礼を受ける決心を既にしたので、『洗礼をして下さい。…でも服が濡れるし…』というような心の葛藤が表れた言葉となりました。牧師さんは、洗礼服に着替えていただくので心配ありません、と仰ったので肉体の私はそれに従うしかありませんでした。

喜びに満たされ雲の上を歩いているような言い知れぬ幸せと、片や水の中に頭まで入る恐怖心という2つの相反する気持を同時に感じながら、あっという間に洗礼は終わりました。そのあいだじゅう私は自分の洗礼を高いところから見ていたのです。

家に戻って、いつしかスピリットは私の身体に戻っていましたが、頭で納得しないまま洗礼をしてしまつてあとで後悔しないかな、という思いが起きましたが、そんな心配はまったく必要ありませんでした。むしろクリスチャンになったことが嬉しくて、道行く人々に知らせて歩きたいくらいでした。

こんな不思議なことがおできになるのは主の御業に違いないと思っています。まるで自分の意思で教会へ行ったように感じていましたが、主は頭の固い罪深い私をご存知で、哀れみと恵みと不思議を持って私を救って下さいました。この日のことは生涯忘れることができません。

今振り返ってみると、クリスチャンにならせていただくずっと前から、神様は私をご自分の方へ引き寄せようとして下さるようにご計画されていたことが人生のいたるところでみとれます。なんとという恵みでしょう。良いことも悪いことも、この半生で経験したことはすべて栄養となり、何一つ無駄な時間や無駄な経験は無かったこともわかりました。こんなちっぽけな私を見逃さずに、むしろ、『あなたは私の目には高価で尊い』と仰って下さるのです。

大いなる神の愛は私をつくり変え、この世を去った後も永遠の命を与えると約束してくださっています。驚くばかりの恵みです。主に栄光あれ!



## 案内・ニュース

- 末広和美姉のお母様が4月8日のイースターの日に77年の地上の信仰生涯を全うし天国に凱旋されました。ご遺族の方々の上に天来の慰めをお祈りします。
- 4月15日、鶴田牧師夫妻はカリフォルニアの教会でご奉仕をされますので、代わって李ヨハネ先生が礼拝のご用をして下さいます。
- 4月17日から5月4日まで、鶴田牧師夫妻は日本へ伝道旅行に行かれます。佐世保、長崎、高砂、大阪、富山、名古屋、東京、千葉などの各巡回地での働きのためにお祈りください。22日の礼拝は、優子姉の証しとノーマン長老の奨励、29日は李ヨハネ先生のご用をして下さいます。

## DREAMS COME TRUE

- 2008年までに大きな会堂が与えられるように
- 敬老ホーム設立のために
- 幼稚園設立のために

